

## アルベルト・シュヴァイツァーの作品「わが生活と思想」並びに「生への畏敬」の中に見られる倫理性と現代社会の矛盾について

犬 飼 豊 宣

初めに、Richard Kik は Vom Licht in Uns の中で、Albert Schweitzer に就て、次のように述べている。

Als der dreißigjährige Professor der Theologie an der Universität Straßburg—es war der jüngste Professor des Lehrkörpers—seine Eltern und Geschwister, Kollegen und Freunde mit der Mitteilung überraschte, er werde Medizin studieren, um als Arzt nach Afrika gehen zu können, wurde dieser Vorsatz als verschroben kritisiert, als verrückt belächelt und von nur wenigen ernst genommen. Dieser Vorsatz jedoch hat eine sehr tiefe Wurzel in seiner seelischen Entwicklung, sie geht in die Zeit der Kindheit und Jugend zurück. Schon in der Kindheit war ihm die Frage erstanden, ob er das Glück seiner Jugend im frohen Elternhaus als etwas Selbstverständliches hinnehmen dürfe, und ob er dafür nicht an der Last von Weh und Not, die auf der Welt liege, mittragen müsse. In seinem Büchlein: „Aus meiner Kindheit und Jugendzeit“—das Büchlein gehört zum Schönsten, was Albert Schweitzer geschrieben hat—stehen die Worte: „Wer viel Schönes im Leben erhalten hat, muß entsprechend viel dafür hingeben. Wer von eigenem Leid verschont ist, hat sich berufen zu fühlen, zu helfen, das Leid der andern zu lindern. Alle müssen wir an der Last von Weh, die auf der Welt liegt, mittragen.“ Das Glücksgefühl seiner Jugendzeit und das Ergriffensein von dem Weh, das er in der Welt herrschend erlebte, verbanden sich miteinander und ließen ihm in der Jugend schon das Verständnis für das Wort Jesu, daß wir unser Leben nicht für uns behalten dürfen, erwachsen.

ここで、Richard Kik は、30才の若い神学教授 Albert Schweitzer が、一大決心をして、アフリカの医者になるまでの経過を述べ、この決心が決して、気まぐれな心からではなく、彼の幼少、青春時代に深い根をもっていることを強調している。即ち、Schweitzer は、幼少時代から 子供は自分らにとって、社会で当然の権利のように考えられている温かい家庭の中で、両親の保護のもとに、何等の苦悩もなく、幸福に日々を過してよいのであろうか、それとも、苦悩にみちた社会の重荷の一端を、当然子供なりにわが身に背おっていくべきではないだろうか、という疑問をもっていたことを述べている。そして、Schweitzer の「わが幼少時代と青春時代から」の著書の中で、「人生において、より多くの すばらしいものを得ることのできる人は、それに応じて、多くのすばらしいものを 占悩する人々にあたえなければならない。また、自分の苦悩から守られている人は、他人の苦悩を、やわらげる責任を感じなくてはならない」と書いてあることに触れ、このような考え方が Schweitzer をして「イエス」の教え: „Wir dürfen unser Leben nicht für uns

behalten“ に近づけさせ、彼をして、生きとし生けるもの すべてへの「生への尊敬」の精神を自覚させていったことを述べている。筆者は、Schweitzer の幼少において芽生えたこの根本思想が 彼の爾後の すべての作品の中に 脈々として流れているのを感じるのである。

Schon seit meinem Unwersitätsjahren hatte ich angefangen, der Meinung, daß die Menschheit in einer sicheren Entwicklung zum Fortschritt begriffen sei, mit Bedenken zu begegnen. Ich hatte den Eindruck, daß das Feuer der Ideale herunterbrannte, ohne daß man es bemerkte oder sich Sorgen darüber machte. Die „Realpolitik“ bedeutete die Guttheißung eines kurzsichtigen Nationalismus und das Paktieren mit Mächten und Tendenzen, die man bisher als fortschrittsfeindlich bekämpft hatte. Mir wollte es vorkommen, als ob wir im geistigen Leben vergangene Generationen nicht nur nicht überholt hätten, sondern vielfach nur von ihren Errungenschaften zehrten……und daß gar mancherlei von diesem Besitze uns unter den Händen zu zerrinnen begönne.

ここで彼は、現代社会における政党、大企業など、「既成組織」のもつ権力を鋭く批判し、われわれは精神活動の面においては前代に、はるかに及ばない許りではなく、あらゆる点で、前代人の残した精神的偉業を食いつぶしており、さらに、このままでは人類の精神活動は全く頽廃し、やがては人類の滅亡の危機がくることを警告している。1945年、敗戦によって物心共に、完膚なきまでに破壊され、焦土の中から最大の苦難に満ちた道を歩みつづけ、25年の歳月を経た日本は、その民族のもつ本来の忍耐と努力とによって、いまや、いわゆる経済大国として成長し、内外共に、その実績を認められるに至った。一方、体制、企業の権力は、昭和元祿を謳歌することによって一般大衆をして戦争の悪夢と責任を忘却させ、大国意識を植えつけることによつて民族意識を昂揚させ、着々として経済大国から政治大国へ、さらには、軍事大国への道を歩ませている。一方、内には、現代日本に内包された種々の矛盾、即ち、倫理性喪失による社会道徳の低下、さらに、これから派生する殺傷、人命軽視、諸公害、自然破壊など、種々の社会犯罪の激増、物質文明、機械文明など、いわゆる「力」の文明の下に、完全に圧殺された精神文明の顕著な衰退、さらに、これから必然的に生じる人間性喪失などの諸問題、さらに外には、アメリカを中心とした諸外国との軍事的、政治的、経済的の諸問題など、内政、外交面において容易ならぬ問題が山積している。一方、諸外国に目を向ければ、わが国と全く同様に、彼等のもつ軍事、政治、経済など、あらゆる面における矛盾、相剋に気づぬものはいないであろう。

In dem neuzeitlich europäischen Denken ereignet sich das Tragische, daß sich in einem langsamen, aber unaufhaltbaren Prozeß die ursprünglich zwischen der Welt- und Lebensbejahung und dem Ethischen bestehenden Bande lockern und schließlich ganz lösen. Es kommt also dahin, daß die Menschheit von einem Fortschrittswillen geleitet wird, der veräußert und die Orientierung verloren hat. Welt- und Lebensbejahung an sich kann nur eine unvollständige und unvollkommene Kultur hervorbringen. Erst wenn sie sich verinnerlicht und ethisch wird, besitzt der sich aus ihr ergebende Fortschrittswille die zur Unterscheidung zwischen dem Wertvollen und dem weniger Wertvollen erforderliche Einsicht und erstrebt eine Kultur, die nicht nur aus Errungenschaften des Wissens und Könnens besteht, sondern vor allem den Menschen und die Menschheit geistig und ethisch voranbringen will.

ここで彼は、現代社会においては、従来の「人生肯定」と、「倫理性」との確乎たる明白な結合が次第に解消しつつあることを強調し、人類が、ただ単に表面的な「進歩意思」によってのみ、左右されるにいたったことを強く警告している。さらに、真の人類文化は、「世界人生肯定」が内面化され、倫理化されて、はじめて真の文化たり得ることを強調している。〔註〕（彼は仏教、波羅門教は絶対的に「世界人生否定」の宗教と見なし、キリスト教は「行為の倫理」を内にもっていることによって、世界人生肯定であると見なしている）。現代の日本、並びに、世界各国の現状に対する、鋭い警告と見ることでできよう。筆者はまず、極わめて幼稚な疑問の提出から始めよう。人類はなぜ互いに相剋しあい、人類の最も野蛮な行為であり、かつ、国際公害ともいえるべき戦争をあえてしなくてはならないのか。ある国家が、自己の民族繁栄のため、最大の努力を払うのは、民族保存の本能によって当然であろう。しかし、自明のことながら、他の国家も同様に、己れの民族発展のために最大の努力を払っているのだ。もし、より強大な国家が、己れの民族繁栄のために他の国家を「力」で制圧しようとするれば、その瞬間、前者は完全に人間性を喪失し、他の動物と同列、または、それ以下になりさがるしまうのだ。ライオンは満腹のときは横を通る小動物に決して手を出さないとされているではないか。また、鳥類でさえ、おのおのの「島」を守って、他の鳥の領域を侵さないといわれている。現代の諸国家はこの事実をたがいに深く反省しなくてはなるまい。さらに、諸国家は、一体、なぜ「相互互譲」の精神に基き、互いの人間性を尊重しつつ、平和の世界の中に生きるという極わめて自明の理に逆らわなければならないのであろうか。さらに、人類は、なぜ己れの思想を主張し、他人のそれを侮蔑、制圧しなければならないのか。しかるに、現代においては、弱少国家の殆んど民族は自由であるべき自己の思想を制圧され、二つの巨大国家の全く異質な思想の挾撃におののいているではないか。自己の思想は自らの長い思索と経験を通して、自らの手で築きあげるべきもので、決して、他から強制弾圧されるべき性質のものでないことは自明の理であろう。しかしながら、現実には、弱少国家の指導者達が彼等の独自の思想をもって、その民族と共に進まんとするとき、かならず、その思想にあい反する巨大国家が、あるいは政治的に、あるいは経済的に、さらには軍事的に彼等の内政に不当に干渉し、その指導者達を威嚇し、あるいは抹殺し、自己の思想の信奉者達、または、政治的偽善者達を逆に擁立し、自己の思想の拡大、宣伝をはかるのだ。かくして弱少国家の指導者達は、二つの全く異質な思想に挾撃され何れか一方の巨大国家の傀儡と化し、最後には宿命的な内紛、あるいは戦争の泥沼の中に引き摺りこまれていくのだ。さらに、巨大国家对巨大国の場合、互いに恐るべき殺戮兵器開発を競いあい、己れの陣営の拡大のためには、一般民族の意思を完全に無視し、人類の平和と進歩に貢献すべき筈の努力を逆に、人類の不幸と頽廢の方向に向けているのが現状である。ベトナム戦争、中東紛争、東西、南北に分割された諸国家の現状を見れば容易に、その実態が把握できよう。このように、同一民族を思想的に分析し、罪なき民族を戦争の渦中に巻きこむ巨大国家の驕慢、不遜の権力こそ、全人類は断呼として排撃すべきであり、さらに、この思想的分断を逆に利用して民族の指導者になるべき野望をもつた偽善的、政治指導者こそ、断呼、排撃されるべきであらう。同一民族が、異質の思想の名のもとに、まつ二つに分断されることなど、人倫上、決して許さるべきことではない筈だ。では、人類は如何にしたら悲惨きわまりない現代の戦争を避け、人類

の真の平和を勝ちとることができるであろうか。筆者はこゝで、Albert Schweitzer の „Aus meinem Leben und Denken“ 並びに、„Die Lehre von der Ehrfurcht vor dem Leben“ の中に流れる、生きとし生けるもの、すべてへの「生への尊敬」を基盤とした、彼の倫理性と、これに基く彼の「文化世界観」、さらには、人倫的組織としての彼の「世界国家」の思想を引用しつつ戦中、戦後にかけての日本のもつ、さらには日本を取り巻く諸外国のもつ種々の矛盾と相剋について、若干の考察をこころみてみよう。

Dem wahrhaft etischen Menschen ist alles Leben heilig, auch das, das uns vom Menschenstandpunkt aus als tiefer stehend vorkommt. Unterschiede macht er nur von Fall zu Fall und unter dem Zwange der Notwendigkeit, wenn er nämlich in die Lage kommt, entscheiden zu müssen, welches Leben er zur Erhaltung des anderen zu opfern hat. Bei diesem Entscheiden von Fall zu Fall ist er sich bewußt, subjektiv und willkürlich zu verfahren und die Verantwortung für das geopfert Leben zu tragen zu haben.

彼の思想の要約は、前述のように、生ある萬物に対する「生への畏敬」の倫理である。生きとし生けるものすべてへの「生への畏敬」の精神である。すべての生物は、その宿命的生存競争のきびしい掟のために、ある場合には、他の生命を犠牲にしなくてはならない残酷な運命をもっている。この場合においてすら、人類は犠牲となった生命に対する道義的責任を自覚すべきであることを強調している。およそ、「生」をもつ萬物、これすべて平等の精神である。この「生への畏敬」の精神に立脚し、これから当然、導き出されるべき筈の倫理観を、自らの信念としてもつに至れば、社会の倫理性は確立し、現代社会から、やがて戦争の恐怖は消滅し、全世界に、本当の意味での平和の到来も不可能なことではあるまい。筆者は、彼の作品を読むとき、彼の思想の中には前述の如き、人間の倫理に基く、「世界国家」樹立の悲願がこめられていることを強く感じるのである。„Wilhelm Meisters Lehrjahre und Wanderjahre“ を、はじめとする一連の作品から、法則と秩序を最大限に尊重し、純粋「人間性」の回復の必要性を力説し、自然、および人生への深い愛情を胸に抱きつけ、人類による「共同世界国家」建設の映像を、心の奥深く蔵しておいた、かの Goethe を考えるとき、彼の理想の投影を Schweitzer の理想の中に明瞭に認めることができるのではないか。

まず、1930年代後期の日本を回顧したとき、ここには「国家総動員法」なる戦時中の軍国主義的法律が厳然として存在し、一般大衆を弾圧し、「大東亜共栄圏」の幻想のもとに、第二次世界大戦に突入していった。ここでは、軍国主義思想以外の一切の主義、主張は否定され、大衆は唯、唯々諾々として、盲目的に、国の最高理想と称する「大東亜建設」のための戦争に狩り出され、尊い人命を失っていった。時の軍閥が強大で、なお大衆が戦争を納得しない場合、軍閥権力の大衆への弾圧は、益々反倫理的、反道徳的なものとなるであろう。戦争は人間の倫理性を完膚なきまでに破壊せしめ、人間をして完全に野獣化せしめ、まさに、弱肉強食の世界の再現であり、相手を殺さなければ自分自身が殺される宿命をもつ最も非倫理的な世界犯罪である。

Bei so und so viel Gelegenheiten mußte ich feststellen, daß die öffentliche Meinung öffentlich kundgegebene Inhumanitäts Gedanken nicht mit Entrüstung ablehnte, sondern hinnahm und inhumanes Vorgehen der Staaten und Völker als opportun guthieß. Auch für das Gerechte und Zweckmäßige schien mir nur noch ein lauer Eifer vorhanden zu sein.

Aus so und so viel Anzeichen mußte ich auf eine eigentümliche geistige und seelische Müdigkeit des arbeitsstolzen Geschlechts schließen.

彼はここで、現代においては、政党、企業など、「既成組織」のもつ権力によって公表される一切の非人道的思想に対しては、大衆世論はこれを拒否することなく、かえって、これを自らすすんで受け入れ、国家、または民族の非人道的行為を是認さえしていると訴えている。既述したように、まさにこの時代は、日本においては、軍閥から公表される非人道的な思想に対して、大衆世論は激怒して 断呼、これを拒否するような行動にいでず、かえって、時の権力に迎合し、熱狂的に一億一心主義を唱え、これに何等の懐疑、批判を加えず、賛同していったのである。一体、「世論」というものは、一方においては大衆意見の集団的表明であり、それは 大衆の意見のある程度、的確に表示する「判断基準」を示すものであるが、他方、それが権力的なものに弾圧され、または、真実と逆の方向に扁動された場合、これに盲目的に従い、場合によっては 熱狂的に、権力のあやまった判断を煽りたてる無責任の一面をもつものである。さらに、この大衆と名付けられる集団にしても、まことに無責任な個々の人間の集団から成り立っているものであり、この個々の人間についていえば、現代の個々人は 余りにも排他的であり、かつ、自己中心主義的である。さらに、外で、革新的思想を唱えながら、内では、もっぱら、自己の地位、財産を守る保守的行動に走り、また、現代政治の腐敗を嘆きながら、なんら積極的に、その改善の努力をせず、大平の美酒に酔いしれて、現状に甘んじ、前途の目標を見失い、己れの栄達のためには 他人をも、あえて犠牲にすることをいとわず、他人の栄達をそねみ、彼等の不幸を喜び、そこに一片の人倫的「人間愛」さえ、持ちあわせないのが普通である。これら個々の人間の集団的意見である世論が無責任の一面をもつことは、以上のことから 極わめて当然のことであろう。Goethe は、Eckermann との対話の中で、次のように述べている。「世論において、人間が誤解され易いのは、全く驚くほどだ。私は、かつて大衆に対して、如何なる罪も犯したおぼえはないが、今では完全に大衆の友ではないといわれている」と、嘆いている。われわれは個々の姿勢を正して、過去の過ちを二度と繰り返かえさないよう、すべての問題において、正しい世論を作りあげていかななくてはなるまい。

さきに述べた軍閥権力に対する大衆世論の共感、賛同について、小松茂夫氏は、その著書「権力と自由」の中で、「軍部が政治進出を試み、ついに、政治制覇をなし遂げるにいたる31年から37年にいたるまでの七年間の政治過程において、軍部は、一度たりとも、一般国民の批判、もしくは離反を招くということはない。つねに、その圧倒的支持のもとに、政治的進撃を続ける。軍部の、そうした政治進出を阻み得るもの、そして、軍部もまた、そのことを予想するもの、それは、したがって、既成の政治勢力に限られる。しかし、「文事官僚」はいち早く、軍部、すなわち、「軍事官僚」に同調する姿勢を明らかにし、既成政党も、やがて、その大半が、先を争って、軍部追隨を競うにいたる。それゆえ、軍部の政治進出は、さながら、無人の野を行く。時人の評に従うならば、軍部は、国民の要望のもとに、政治の舞台上に登場し、その大きな期待と、その熱烈な支持のもとに、主役を演ずる。軍部の行なうところ、つねに国民の拍手と喝采が存する……」と、述べている。

Bei der heutigen Mißachtung des Denkens ist aber noch Mißtrauen gegen es mit im Spiele. Die organisierten staatlichen, sozialen und religiösen Gemeinschaften unserer Zeit sind darauf aus, den Einzelnen dahin zu bringen, daß er seine Überzeugungen nicht aus

eigenem Denken gewinnt, sondern sich diejenigen zu eigen macht, die sie für ihn bereit halten. Ein Mensch, der eigenes Denken hat und damit geistig ein Freier ist, ist ihnen etwas Unbequemes und Unheimliches. Er bietet nicht genügende Gewähr, daß er in der Organisation in der gewünschten Weise aufgeht. Alle Körperschaften suchen heute ihre Stärke nicht so sehr in der geistigen Wertigkeit der Ideen, die sie vertreten, und in der der Menschen, die ihnen angehören, als in der Erreichung einer höchstmöglichen Einheitlichkeit und Geschlossenheit. In dieser glauben sie die stärkste Widerstands- und Stoßkraft zu besitzen. Sein ganzes Leben hindurch ist der heutige Mensch also der Einwirkung von Einflüssen ausgesetzt, die ihm das Vertrauen in das eigene Denken nehmen wollen. Der Geist der geistigen Unselbständigkeit, dem er sich ergeben soll, ist in allem, was er hört und liest; er ist in den Menschen, mit denen er zusammenkommt; er ist in den Parteien und Vereinen, die ihn mit Beschlag belegt haben; er ist in den Verhältnissen, in denen er lebt. Von allen Seiten und auf die mannigfachste Weise wird auf ihn enigewirkt, daß er die Wahrheiten und Überzeugungen, deren er zum Leben bedarf, von den Genossenschaften, die Rechte auf ihn haben, entgegennehme. Der Geist der Zeit läßt ihn nicht zu sich selber kommen. Wie durch die Lichtreklamen, die in den Straßen der Großstadt aufflammen, eine Gesellschaft, die kapitalkräftig genug ist, um sich durchzusetzen, auf Schritt und Tritt Zwang auf ihn ausübt, daß er sich für ihre Schuhwiche oder ihre Suppenwürfel entscheide, so werden ihm fort und fort Überzeugungen aufgedrängt. Durch den Geist der Zeit wird der heutige Mensch also zum Skeptizismus in bezug auf das eigene Denken angehalten, damit er für autoritative Wahrheit empfänglich werde,……aber auch das Übernehmen autoritativer Wahrheit mit geistem und eithischem Gehalt bringt den Skeptizismus nicht zum Aufhören, sondern deckt ihn nur zu,……Die Stadt der Wahrheit kann nicht auf dem Sumpfboden des Skeptizismns erbaut werden.

彼はここで、組織された現代の諸政党、大企業、あるいは、宗教団体などの既成組織の権力、特に、政党、および、これと癒着した大企業の権力が如何に大きいものであるかを述べている。これらの権力は、一般大衆が独自の信念をもつことを喜ばず、これらの権力のもつている思想をそのまま受けとるよう大衆に強制する。これに反するものには手段を選ばず彼等を弾圧し、あるいは威嚇する。たとえば、大企業の権力は一般大衆を完全に自家業籠中のものとし、自己の製品をマスコミ、その他、あらゆる手段を講じて、ほとんど、半強制的に一般大衆に購入させる魔力をもっているものである。彼はその一例として、靴墨や、固型スープの大企業が、大都会のネオンの広告によって、街を行く一步毎に大衆に強い印象をあたえ、ついに、その製品を購入させてしまう例をあげている。現代日本における大企業の利潤追及のための、大衆への一大攻勢の姿を、そのままきぼりにしているのではない。しかし、思想の強制は一方において、大衆に懐疑主義を芽生えさせる。真理の市府は決して「懐疑主義」の沼地の上には建設され得ないことを彼はここで強調している。1930年以降、今日に至るまでの日本の諸体制、諸企業に対する鋭い警告と見るべきであろう。1940年中期以降、即ち、敗戦後の日本においては、歴代の施政者達は口々に「平和日本」、  
「文化国家建設」を公約してきた。なるほど戦後は経済の復興と共に、高等教育機関の急増、また、国民所得の増大によって、前戦は極く一部に限られた特権階級の独専場になっていた高等教育への一般階級の参加など、確かに、「文化国家」への前進は認められよう。しかし、日本の施政者達は、真に文化の本質的なものを理解し、それに立脚した諸政策をとっ

て来たといえるであろうか。彼等は「文化」(culture)と「文明」(civilization)の極わめて自明の相違を完全に混同しておったのではなかろうか。あるいは、両者の区別を明瞭に認識しながらも、敗戦日本を再建すべき最短の道程として、あえて経済成長政策を最優先的にとりあげざるをえなかったのではなかろうか。事実はまさに、そうであったであろう。しかし、この場合においてすら、彼等はなぜ四分の一世紀にわたる長い経済発展の期間を通じて、これと並行して、「精神文明」の充実を中心とした諸政策などの、いわゆる一連の「文化政策」を強力に推進しえなかったのではなかろうか。ここに、物心両面における均衡を失った現代社会の種々の矛盾の芽生えの根本原因があったのである。

Als das Wesentliche der Kultur ist die ethische Vollendung der Einzelnen wie der Gesellschaft anzusehen. Zugleich aber hat jeder geistige und jeder materielle Fortschritt Kulturbedeutung. Der Wille zur Kultur ist also universeller Fortschrittwille, der sich des Ethischen als das höchsten Wertes bewußt ist. Bei aller Bedeutung, die den Errungenschaften des Wissens und Könnens zukommt, ist doch offenbar, daß nur eine ethischen Zielen zustrebende Menschheit des Segens materieller Fortschritte in vollem Maße teilhaftig und der mit ihnen gegebenen Gefahren Herr werden könne. Dem Geschlechte, das sich dem Glauben an einen immanenten, sich gewissermaßen von selbst und naturhaft verwirklichenden Fortschritt ergab und meinte, ethischer Ideale nicht mehr zu bedürfen, sondern allein durch Können und Wissen vorankommen zu können, lieferte die Lage, in die es daraufhin geriet, den furchtbaren Beweis des Irrtums, in dem es sich befunden hatte.

彼はここで、文化の本質的なものとして、常に、個人や社会の倫理性を考えている。即ち、人類が如何に進歩しても、彼が倫理的大目標をかゝげて進まなければ、真の文化とはいえないことを強調している。さらに：

Die jüdischen Propheten Amos und Jesaja (760-700 v. Chr.), Zarathustra (7. Jahrhundert v. Chr.), und Kungtse (560-480 v. Chr.) bedeuten den großen Wendepunkt in der Geistesgeschichte der Menschheit. Zwischen dem 8. und 6. Jahrhundert erheben sich denkende Menschen, die drei fern voneinander wohnenden, in keiner Beziehung zueinander stehenden Völkern angehören, miteinander zur Erkenntnis, daß das Ethische in Unterworfenheit und die überlieferte Volkssitte, sondern in tätiger Hingabe des einzelnen an seine Nebenmenschen oder an die Ziele der Bessergestaltung der gesellschaftlichen Zustände bestehe. In dieser großen Revolution beginnt die geistige Menschwerdung des Menschen und mit ihr die der Höchstentwicklung fähige Kultur.

と述べている。即ち、こゝでは、倫理性とは従来の「風俗」、「習慣」に盲目的に従うのではなく、各々個人が自己を犠牲にしても隣人のため、広くは社会の改善のために努力することにあるとしている。これこそ、人類最高の文化への道であることを強調している。佐藤俊夫氏は、次の如く述べている。「人間は自己の内なる人間を探究すると共に、自己の外なる自然を究明しようとする。人間の探究と自然の究明とは、理想をめざす道程という限りで、別のものではない。人間の究明は、樹木における根であり、自然の究明は、その枝である。文化にあっては、その成果が客体的のものではなく、むしろ、主体的努力そのものの方が大切である」と。施政者は、後者を強調する余り、前者を余りにも等閑視してしまったのではあるまいか。われわれは過去の歴史において、文化と文明の不均衡の故に、世界の歴史のひのき舞台から脱落していった国々を数多く知っている。古代ローマ、中国などがその好例であろう。文化と文明は、まさに、人間の歴史の両車輪と考えられよう。日本の

歴代の施政者達は、かくして、経済復興政策を主軸とした表面的文明社会をつくりあげることによって、人類にとって、もつとも本質的な精神文化社会をつくりだす努力に欠けておったといえるであろう。彼等は近代科学によって成立した、物質文明、機械文明など、いわゆる「力」の文明は、かならず、その絶頂で減り去るもので、人類にとって永久に減り去る「力」、それはまさに精神文化であるという過去の歴史の鉄則を余りにも等閑視してきたのではなかろうか。1960年代になって、日本はさらに奇蹟的な経済復興を成し遂げ、60年代の後半には、西独乙に追いつき、70年代にはアメリカ経済に重大な影響をあたえるであろうといわれるまでに至った。吉田静一氏は、論壇時評（朝日新聞）の中で、長州一二氏の論説「進行するアジア経済安保」論を引用し、「70年代アジアは、日本を中心とした、世界資本主義のニュー・フロンティアになるか、あるいは、世界革命のニュー・フロンティアになるか、二つの力が真正面からぶつかり合う流動の地点となるであろうと予測している。しかも、その中であって、日本は、アジアの経済大国から政治大国へ、さらに、軍事大国へ進む内的衝動を充分にもつている」と、論じている。事実、経済発展は、一般大衆に、ナショナリズムを旨めさせ、ナショナリズムは、強力な右翼思想と結びついて、軍国主義思想の台頭を飛躍的に促進させる危険性を充分にもつているものと考えなくてはなるまい。現に、三島事件をはじめとして、各地において、右翼団体の結成が盛んに行われているのではないか。さらに長州氏は、中曽根氏の説を引用し、「中曽根氏は、75年代には、4000億ドルと予想される、日本の「GNP」（国民総生産高）の、のびからいって、遠からず「アジア・太平洋経済圏、文化圏」なるものを考えなければならないだろう」と、述べたことを報告している。「アジア・太平洋経済圏」なる構想は、かつての「大東亜共栄圏」という、あのいまわしい幻想を再び思いおこさせるような気がしてならないのは、筆者一人であろうか。さらに、23日付の朝日新聞は次のような要旨を載せている。「佐藤首相は国連総会で、わが国は、軍事国家への道は、とらないと演説をしている。一方、殆んど、時を同じくして、中曽根氏が東京で年間約一兆円という、わが国を一挙に軍事大国へ押しあげるような超大型予算を伴う第四次防衛力整備計画なるものを発表している。この二つの同時的発表は、大きな矛盾ではないかと。坂本義和氏は、村上薫氏の論文を引用して、「経済大国になっても、軍事大国にならない」という、その境目が経済大国の内部からの変質によって、まつ消されはじめていると、述べている。さらに坂西志保氏は中央公論で、「憲法第九条にもかかわらず、現在の政治家が、政権の座におる以上、日本の再軍備は単に時間の問題である……」とさえ述べている。さらに、なんらかの形で、この第九条の強力な破棄運動が国民の間に、決しておきないと、誰が断言出来よう。既に述べたように、大衆世論は、かならずしも常に正しいものではないことを銘記すべきである。とにかく、方向を失った単なる表面だけの進歩意思によって引きまわされている、わが国の現状に対して、われわれ国民は、現実を直視し、決して目を掩うてはなるまい。経済大国を自負する前に、まず完全に失われた精神文化の充実にこそ邁進すべきであろう。したがって、物心両面における均衡、並びに、軍国主義復活阻止こそ、70年代の日本人にとって、最大の課題といえるであろう。精神文化については、前川国男氏は朝日新聞で、次の如く述べている。「ますます豊饒を誇る物質とは、うらはらに、人間の精神は、いよいよ、やせ衰えて、死に瀕している現代文明社会こそ、堅固に見えたローマ帝国の末期にも似ている。われわれもまた、法燈を掲げた12人の使徒を待つべきではないか。精神をもたぬ専門技術は盲目



だ。現代の技術は、それが技術的に可能だとわかれば、人間の生命も含めて、他の一切をかえり見ることなく、その実現に邁進する。技術は本来、中立のものだ。しかし、精神の退廃は技術の退廃に直結する」と。まさに、精神なき文明社会こそ、滅亡の奈落のふちに立つ危険きわまりない社会といえるだろう。Schweitzer も、現代はまさに、人類の精神的頽廃期であることを重ねて強調している。筆者はこゝで、今や全世界において重大な社会問題となっている公害、自然破壊について若干、触れておこう。われわれは、この社会犯罪たる公害、自然破壊を最少限度にとどめなくてはならない。人間の生命を脅かすまでにいたった、いや、既に幾多の生命を奪ってしまっている今日の公害に対する一般大衆の悲痛な抗議に対して、施政者、企業も、ようやくなんらかの施策をとるべく、よぎなくされてきている。政府による「公害対策本部」の設置、また、臨時国会への「公害」全法案の提出、さらには諸企業、各地方自治団体による「公害対策」、「環境権」の問題など、確かに社会全体が丸となって公害対策にとりくもうとする機運は熟したと考えられよう。ただ、施政者が今まで、大企業最優先主義を採り、さらにはその結果、必然的に生ずる諸公害に対して、長期的予測を全々たてられ得ず、政策が常に事後対策的、対症療法的であったことは許せないことである。さらに、施政者はこの際、企業との癒着をきっぱり、たち切る位の覚悟が必要であろう。この点、科学技術の進歩による環境破壊問題については、産業立地条件、廃気、廃液処理施設など、あらかじめ、国家による計画的な完全防止政策がとられている、社会主義諸国の勝れた施政に、一日の長を認めることができよう。資本主義国における利潤追求を第一目標にかゝげる企業と、この企業に生活を賭けた労働組合員のおかれた微妙な立場を考えると、企業は勿論、施政者の断乎たる決意と、国民全体の固い決意がなければ公害追放は、不可能な難事であろう。企業における労働者の立場についてはすでに述べたが、現在、公害への取り組み方があいまいになり勝ちだった労働運動にも、まず、労働災害への抵抗を、ひとつの「バネ」として反公害運動が根づきはじめていることも確かである。したがって、この際、国民全体が打って丸となり、人類の英知を集中し、公害防止技術を前進させ、中央集権的考えを一掃し、中央官庁の権力を地方自治体に分散させ、各地公害を防方のかゝえる諸公害を直接、企業ならびに、地方自治体が国民と共に解決していくことが、止し得る最大の眼目になるのではないだろうか。さらにわれわれは自然破壊を最少限度にとどめなくてはならない。江山正義氏は、彼の随筆の中で、次のように述べている。「自然保護が叫ばれ、公害追放が強調され、70年代は新しい意味での自然時代を迎えることになった。このことは、取りも直さず、自然と人間との間の新しい倫理を確立するということである。……

わが国でも、ようやく自然保護憲章を制定しようとしている。こゝでも、自然と人間の倫理性の確立が先決であろう。自然保護憲章は、自然に対する人間の具体的行動の一つ一つについて、倫理的解決の上にとたない限り、なんらの成果も期待出来ないだろう」と。

さらに、自然破壊について、朝日時評は、故赤羽裕氏の論説をあげて、次のように述べている。「ヨーロッパの一般社会では、いったん個人が完成孤立化され、それ故、逆に、一般的、普遍的道德観念が成立し、自然への加工も、社会全体の必要によって限定される。戦後の日本では、「共同体」の人間がそのままいきなり共同体を奪われて、孤立の世界にほうり出された。そのため、無制約的な私利追求という「賤民資本主義」的条件が、社会的に与えられ、環境破壊も無制限に行われることになった」と。

Der große Fehler aller bisherigen Ethik ist, daß sie es nur mit dem Verhalten des Menschen zum Menschen zu tun zu haben glaubte. In Wirklichkeit aber handelt sich darum, wie er sich zur Welt und allem Leben, das in seinen Bereich tritt, verhält. Ethisch ist er nur, wenn ihm das Leben als solches, das der Pflanze und des Tieres wie das des Menschen, heilig ist, und er sich dem Leben, das in Not ist, helfend hingibt. Nur die universelle Ethik des Erlebens der ins Grenzlose erweiterten Verantwortung gegen alles, was lebt, läßt sich im Denken begründen. Die Ethik des Verhaltens von Mensch zu Mensch ist nicht etwas für sich, sondern nur ein Besonderes, das sich aus jenem Allgemeinen ergibt. Die Ethik der Ehrfurcht vor dem Leben begreift also alles in sich, was als Liebe, Hingebung, Mitleiden, Mitfreude und Mitstreben bezeichnet werden kann. Dem wahrhaft ethischen Menschen ist alles Leben heilig, auch das, was uns vom Menschenstandpunkt aus als tiefer stehend vorkommt. Unterschiede macht er nur von Fall zu Fall und unter dem Zwange der Notwendigkeit, wenn er nämlich in die Lage kommt, entscheiden zu müssen, welches Leben er zur Erhaltung des anderen zu opfern hat. Bei diesem Entscheiden von Fall zu Fall ist er sich bewußt, subjektiv und willkürlich zu verfahren und die Verantwortung für das geopferte Leben zu tragen zu haben.

彼はここで、今までの倫理は、人間対人間における関係だけを問題にしてきた。これは大きなあやまりだ。生きとし生けるものの、すべての生命が神聖であり、人間は勿論、その他の動物、植物一切がこれに含まれているものであることを強調している。さらに前述したように、生命の間に区別をつける場合は、必然性によって強制される場合のみであり、この場合においてすら、犠牲となった生命に対する責任を自覚しなくてはならないことを重ねて強調している。かくのごとき萬物への「生への尊厳」こそ、自然破壊を防止する最大、かつ最短の道であろう。次に、1960年代から1970年代にかけて目を国外に向けてみよう。口に「ヒューマニズム」を唱え、世界の自由主義陣営の旗頭であり、世界の繁栄を一手に収めてきたアメリカにおいてすら、種々の矛盾に苦悩しているのに気づく。なかでも、「人種問題」、「ベトナム戦争」、「カンボジア」への軍事的侵入、自由貿易から、一種の保護貿易への転換など、深刻なアメリカのもつ内政、外交問題が目につく。特に、人道主義に徹していると自称するアメリカにとつて、人種差別問題が現実に存在している事実は、はなはだしい矛盾といえよう。さらに、ベトナム戦争についても、自己の思想の他国への軍事的強制と見られても仕方がないであろう。ましてや、カンボジアへの軍事侵入については、なおさらのことであろう。一方、ソビエトに目を向けてみると、ここでも、種々の矛盾に苦悩している姿をみることができよう。全人民平等の共産主義を唱えながら、個人的人権の束縛、広大な領地を保有し、なおかつ、自国の領土の拡大をはかり、幹部の独裁による一般人民の遊離、人民の自由諸国への頻繁な亡命、さらには、中国との宿命的な離反、チェコへの不当な軍事的侵入など、その矛盾はアメリカと同様枚挙に遑がない位である。

Nun bietet die Welt aber das grausige Schauspiel der Selbstentzweiung des Willens zum Leben. Ein Dasein setzt sich auf Kosten des anderen durch, eines zerstört das andere. Nur in dem denkenden Menschen ist der Wille zum Leben um anderen Willen zum Leben wissend geworden und will mit ihm solidarisch sein. Dies kann er aber nicht vollständig durchführen, weil auch der Mensch unter das rätselhafte und grausige Gesetz gestellt ist, auf Kosten anderen Lebens leben zu müssen und durch Vernichtung und Schädigung von Leben fort und fort schuldig zu werden. Als ethisches Wesen, ringt er aber darum, dieser

Notwendigkeit, wo er nur immer kann, zu entrinnen, und als einer, der wissend und barmherzig geworden ist, die Selbstentzweiung des Willens zum Leben aufzuheben, soweit der Einfluß seines Daseins reicht. Er dürstet danach, Humanität bewähren zu dürfen und Erlösung von Leiden bringen zu müssen.

彼はここで、人類も、他の動物と同様に、他の生命を犠牲にして、生きなくてはならないという残酷な法則にしばられていることを述べ、倫理的な存在としての人間は出来得る限り、この制約からのがれるべきであることを強調している。ただ、彼はここで人間の場合においてのみ、その「生への意志」が他の「生への意志」を知り、これと「連帯」することを欲していると述べていることは今後の国際間の諸問題の解決にあたって、特に重大な意味を含んでいるといえるであろう。

Als tätiges Wesen kommt er in ein geistiges Verhältnis zur Welt dadurch, daß er sein Leben nicht für sich lebt, sondern sich mit allem Leben, das in seinen Bereich kommt, eins weiß, dessen Schicksale in sich erlebt, ihm, so viel er nur immer kann, Hilfe bringt und solche durch ihn vollbrachte Förderung und Errettung von Leben als das tiefste Glück, dessen er teilhaftig werden kann, empfindet.

さらに、彼は人間は、自己の生を自分自身のためにのみ生きないで、自分と接触するすべての生命を自分と一つであると考えることによって、人間は世界と真の精神関係に入ることができると述べ、さらに、このことは単に人間対人間許りでなく、生きとし生けるもの、即ち生を持つすべてのものに、いいうることであると述べている。人種差別問題、自然破壊問題に悩んでいる国々に対する鋭い警告と見ることができよう。

Wird der Mensch denkend über das Geheimnisvolle seines Lebens und der Beziehungen, die zwischen ihm und dem die Welt erfüllenden Leben bestehen, so kann er nicht anders, als daraufhin seinem eigenen und allem Leben, das in seinen Bereich tritt, Ehrfurcht vor dem Leben entgegenzubringen und diese in ethischer Welt- und Lebensbejahung zu betätigen. Sein Dasein Wird dadurch in jeder Hinsicht schwerer, als wenn er für sich lebte, zugleich aber auch reicher, schöner und glücklicher. Aus Dahinleben wird es jetzt wirkliches Erleben des Lebens.

前文につづいて、彼はここで、人間が他の一切の「生の尊厳」を認め、これに対して具体的な行為をもつて表現しようとするとき、自分自身のみのために生きるより苦痛は遙かに大きい、しかし生きる喜びはさらに、これにも増して大きいものであることを強調している。

以上、述べてきた内外の諸矛盾、相剋は、これが拡大されると、全人類破滅の戦争への道につながることは容易に想像できよう。国家間の宿命的な相剋について、佐藤俊夫氏は「和辻倫理学とその問題」点の中で和辻理論を引用し、「国家は、(私)を悉く超越して、徹頭徹尾(公)であるところの共同体である。だが国家は、その上になお諸国家を包む「人類共同体」とでもいうべき全体をもつものではないだろうか。国家は、その富に、他国民が参与するのを拒むといった閉鎖的性格をもつことを認め、現実に存在する諸国家の中に顕著に(私)を発揮する国家があることを認める。和辻氏はそこで、「帝国主義的世界統一」にかかわって、諸国家の間の人倫的組織である、「世界国家」を構想する。とはいえ、世界国家は今日の段階では、一挙には、実現不可能であって、それが実現し得るためには、とりあえず、言語、風習、その他の文化の共同によってできた「国民共同体」の立場で確固

たる人倫組織を形成し、さらに、それらの諸国民の間に組織を作るといった過程が必要である」と、述べている。これに関して、過日、行われた社会党議員団による、ソビエト、中国、その他の共産圏諸国の訪問で、アメリカ、ソビエト、中国、日本、その他の諸国家を含む、「アジア安全保障」構想は、これを単に、政治的、経済的、軍事的に実現しようとするならば、その実現は、はなはだ困難といえるであろう。思想を超越した人倫的組織としての構想ならば、あるいはその実現は、可能ではなかろうか。従来のアメリカを中心とした純反共的「安全保障」よりは遙かに、価値あるものといえるであろう。しかし、社会党のこの大構想の以前に、われわれは、まだ、踏むべき重大な一段階があるように思われる。それは、現在の多数党野党の大同団結をはかり、一大強力野党として、政府与党と超党派的に、かつ、積極的に中華人民共和国との国交回復、国連参加の早期実現をはかることである。現に、中国代表権問題に関し、最近、カナダにつづいて、イタリアもこれを承認し、承認国と否認国の数の差は、極わめて少差となり、20日の国連総会で、ついに、重要事項指定再確認決議案は、少数差で成立したものの、「アルバニア案」が過半数をとり、「中国招請」初の過半数が決定した。否認国の総元締めである、アメリカさえ、国連総会における中国代表権の決定する以前に、今までの国民政府支持政策を大きく変えて、中華人民共和国は無視できない現実であること、中華人民共和国が国際社会で、大きな役割を演じることに重大関心をもっていることを発表し、前向きな姿勢を見せるに至っている。この点に関し、日本は中国と近隣国でありながら、アメリカより遙かに保守的であるとさえ、新聞は報じている。この際、日本は二つの中国を認め、場合によっては、二つの敵国を作りあげるような愚かな態度をすて、自ら進んでアメリカを指導していくくらいの断乎たる態度をとるべきである。

Der einzig mögliche Ausweg aus dem Chaos ist, daß wir wieder durch eine Kulturweltanschauung unter die Herrschaft der in ihr gegebenen Ideale der wahren Kultur kommen.

彼は、ここで、これらの現代の混乱から脱することのできる唯一つの道は、人類共通の倫理性に基く、共同の「文化世界観」を作りあげ、これによって、その中に、示唆された真の文化の理想の下に、積極的に、参集し、「文化的共同社会」を樹立することにあると、のべている。最後に、1970年代、日本に、「ニクソン・ドクトリン」に従って、アジアを中心とした後進国への経済援助を大幅に拡大していく方向に向っている。しかし、適切な手段を誤り、軽拳妄動に走れば、厚意はこれら諸国に対して、かえつて仇になり、経済侵略、政治侵略、あるいは、軍事侵略の汚名をきせられる可能性は充分あることを覚悟する必要がある。特に、中国と国民政府に対するわが国の態度如何によっては、前述した如く、わが国自ら、二つの中国を認める過ちを犯す危険性の充分あることを、くりかえして強調しておく。ここに、Schweitzer による先進国の後進国に対する関係を原文のまま、載せることによって、拙論のまとめにしたい。今後、アジア諸国への、日本の、とるべき態度に対しての最良の忠告といえるであろう。

最後に、付記として「わが思想と生活」の拙訳のなかで、適語の表現の若干を、竹山道夫氏の、すぐれた訳から引用させていただいたことを、おことわりしておく。なお、幾多の新聞、雑誌の論説なども引用させていただいたが、ここでは省略した。

Haben wir Weißen ein Recht, primitiven und halbprimitiven Völkern unsere Herrschaft aufzudrängen? Nein, wenn wir sie nur beherrschen und materielle Vorteile aus ihrem Land

ziehen wollen. Ja, wenn er Ernst damit ist, sie zu erziehen und zu Wohlstand gelangen zu lassen. Bestände irgendwie die Möglichkeit, daß diese Völker wirklich für sich lebten, so könnte man sie sich selber überlassen.... Zuletzt ist alles, was wir den Völkern der Kolonien Gutes erweisen, nicht Wohltat, sondern Sühne für das viele Leid, das wir Weißen von dem Tage an, da unsere Schiffe den Weg zu ihren Gestaden fanden, über sie gebracht haben. Politisch sind die kolonialen Probleme, wie sie sich herausgebildet haben, nicht zu lösen. Das Neue, das kommen muß, ist, daß Weiß und Farbig sich in ethischen Geiste begegnen. Dann erst wird Verständigung möglich sein. An der Schaffung dieses Geistes arbeiten, heißt zukunftreiche Weltpolitik treiben....

### 参 考 文 献

- Albert Schweitzer : Aus meinem Leben und Denken  
Albert Schweitzer : Die Lehre von der Ehrfurcht vor dem Leben  
Richard Kik : Vom Licht in Uns  
Albert Schweitzer : Afrikanische Geschichten  
Johann Peter Eckermann : Gespräche mit Goethe  
佐藤俊夫 : 倫理学のすすめ  
佐藤俊夫 : 倫理的散步  
佐藤俊夫 : 教育における人間性の回復  
Carl Hilty : Glück  
小松茂夫 : 権力と自由  
その他

### Summary

**Über das Ethische, das man in Albert Schweitzers Werken lesen kann und über die verschiedenen Widersprüche in der heutigen Welt**

Toyonobu INUKAI

On the ethics pervading Albert Schweitzer's works, "From my life and thought" and "The theory of respect for life" and on the various contradictions of modern world.

This essay deals with the various contradictions not only in present day Japan, but also those in the whole world. Here I quote some important passages concerning ethical problems from the works of Albert Schweitzer. I expect that these contradictions will have been brought to a certain settlement, or at least the easing of tensions on the international scene will have taken a step forward by the time this essay is published. I hope that this essay will promote the peace of our country.